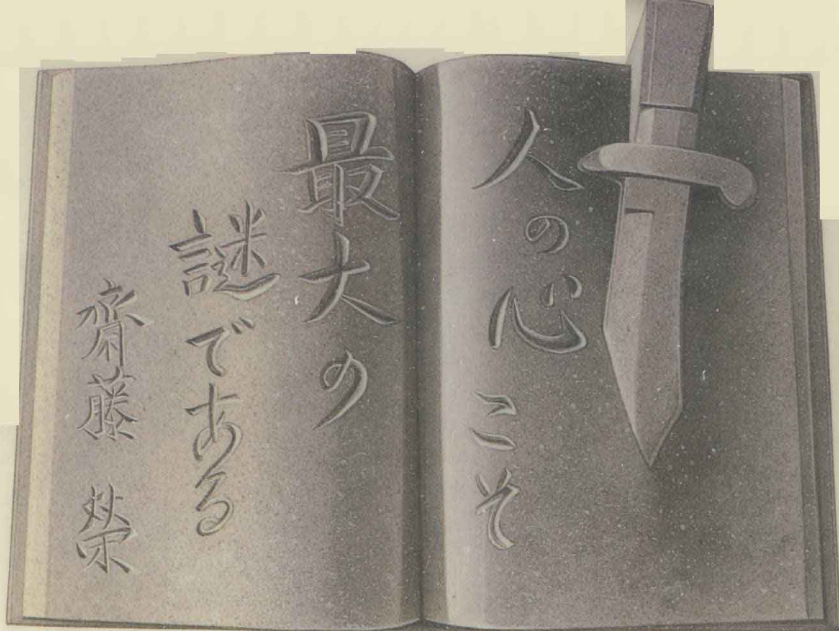




本格推理の世界
齋藤 栄

■書下し力篇

日本のピラミッド
殺人事件

■唯一の歴史劇

戯曲・寒梅

■全著作リスト

分類・齋藤栄ミステリーランド



本格推理の世界
斎藤 栄

徳間書店

斎藤 栄

昭和8年1月14日、東京生れ。

昭和41年、『殺人の棋譜』で江

戸川乱歩賞受賞。著書多数。

人の心こそ最大の謎である

一九八五年一月三十一日 初刷

著者——斎藤 栄

発行者——荒井 修

発行所——株式会社徳間書店

東京都港区新橋四—〇— 電話東京四三三・六二二一 振替東京四—四四三九二

本文印刷——凸版印刷株式会社

カバー印刷——近代美術印刷株式会社

製本——大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本はお取りかえいたします。

©Sakae Saitō 〈編集担当・吉川和利〉

ISBN4-19-123037-9

人の心こそ最大の謎である——目次

〔書下し力篇〕

日本のピラミッド殺人事件

5

〔特別対談〕

わがミステリーを語る

69

斎藤栄VS中島河太郎

〔驚異の秀作処女長篇〕

輝紫蛇邸殺人事件

91

〔多彩なエッセイ〕

折り折りの記

175

忘れられないひと言

176

夢道研究

178

10年はいた二足のわらじ

180

わが愛す

る街

182

『星の王子さま』をくれた

令嬢

184

表現と法

191

漂泊の謀者た

ち 194 第一人者にライバルがいないと

勝負の世界は沈滞する 207 忍者・松尾

芭蕉の周辺 212 東国の隠れた歴史 220

奇術 223 きものへの憧憬 225 たば

ことじゃがいも 227 氷見線に海の幸を

訪ねる 231 ヒバリからムクドリへ 234

人肌共育 237 ゴルフ競演記 242

〔唯一の歴史劇〕

寒 梅 (三幕) 245

〔全著書リスト〕

分類・斎藤栄ミステリーランド 影山荘一

カバーイラスト・野中 昇
デザイン・矢島高光
本文作図・三宅悌司

〔書下し力篇〕

日本のピラミッド殺人事件

日本にピラミッドがあるという、一大キャンペーンは、毎朝新聞社が特別取材班をつくって、全国的におこなわれた。

日本の古代史は、記紀の時代を境にして、それ以前はまだ充分な研究がされてはいない。なぜか学者によって、タブー視されている。

それだけに、長野の皆神山とか、広島の高嶽山やのうが高原というふうには、隠された古代の遺跡を捜し求めるリポートは、多くの人々の関心を喚んだ。

毎朝から委嘱された社外リポーター、岩見重夫記者は、自分自身、古代史に興味を持っていたので、喜んでこのキャンペーンに参加した。

岩見記者は、大学生時代から、「竹内文書」「九鬼文書」や「東日流外三郡誌」といったものに関心を持っていた。それだけに、毎朝の特別取材班の一員として、

「十和田湖周辺の古代遺跡に、ピラミッドを探りあてろ」

という命令を受けたときは、心が浮き立ったのである。

かつて、十和田湖のあるあたりに、超古代の文明が栄えていた。それが大噴火によって湖底に沈み、その文明が亡んでしまったという伝説がある。

それを実証するには、大規模な発掘をしなくてはならないだろうが、今回はそこまでは費用の関係でできない。しかし、積極的に調査をすれば、その超古代文明の片鱗くらいはつかめるのではないか——これが日本のピラミッド探求班のうち、十和田担当の者が一様に懐いた〈夢〉だったのである。

岩見は、自分なりに、下調べをして、一行に加わった。

第一陣として、青森県三戸郡新郷村へ現地入りしたのは、十名であった。団長は、東北国際大学の荒木四郎教授で、その研究室員三名を率いていた。毎朝新聞社としては、社会部の堤副主筆以下、岩見のようなリポーターを入れて四名。このほかに、特殊探査のため、かなり大がかりな電探器や可搬性の磁石などを扱う電気技師の福沢茂という人物と、推理作家の赤西栄次郎が加わっていた。

なぜ、赤西が参加したかといえば、この作家の代表作に『キリストの秘密』という長篇があり、この作品の中で、十和田湖周辺の『キリスト伝説』を扱っていたからだ。

『キリストの秘密』は、長篇だから、簡単に要約することはできないが、新約聖書における矛盾の記載事項を分析し、キリストが青森県三戸郡の新郷村で死亡したのではないかという、大胆な推理を展開している。

こうした推理を、別の角度からみると、古代文明が十和田湖周辺にあったという事実とも、オーバーラップしてくるし、ひいては、日本のピラミッドの存在とも関連してくるというわけである。

そこで、毎朝は、赤西を特別のリポーターとして委嘱し、現地での討論会などにも出席してもらうということを考えていたわけだ。

2

現地入りのアシは、まず三沢空港まで一般の航空機で行き、そこから、特別チャーターした大型ヘリコプターで、戸来岳や十和田新山を北に望む迷ヶ谷の牧場に着陸するというコースだった。

三十三歳の岩見にしてみると、この取材旅行は、ドキドキするほど刺激的だったので、航空機の中でも、隣りに坐った作家の赤西とよく喋った。

五十一歳の赤西は、

「いや……随分、便利になったね。昔、私がヘキリストの秘密を執筆するために、新郷村へ行ったときは、東北本線で八戸から、バスではいったものだよ。タクシーも満足になかったから……。今回は、朝発って、その日の正午には、目的地にゆうゆうと到着しているというんだからね。古代も近くなったもんだよ」

と言って笑った。

「あまり便利になると、古代の神秘というのが薄れてしまう感じがしますね」

岩見は調子を合わせた。

赤西はフフと低く含み笑いを繰り返して、

「いや、そう簡単に薄れるのは、本物の神秘とは言えないだろう。実際に、われわれは、埋もれている

古代に、それほど迫っているとは言えないんだ」

と言った。

「先生は、今度の取材に、どういうことを、一番期待されているんですか？」

岩見は、リポートの主軸を、この作家の視点におくことも面白いかな、と思っていた。

「十和田湖周辺の場合は、キリストとかヘライとかいうことが強すぎて、古代日本への素直なアプローチが少なかったんだね。そこで、今回は、いったん、白紙状態にもどって、あなたのような若い人の目で、埋もれた歴史を見た方がいい。私はなんらかの物証がつかめることを期待していますよ」

赤西は落着いた口調で言った。

確かに、岩見としても、できることなら、科学的、実証的な部分で、一步でも前進できればよいと考えていたので、

「その通りですね」

と、相槌を打ったが、すると、赤西は、ちょっと悪戯好きの中学生みたいな顔をして、

「しかし、地底に眠っている霊が、喚び起こされるかもしれないんです。そうすると、ちょっと怖いな」

と話の方向を転換した。

「霊ですか……」

「ないと思いますか？」

「いや……」

岩見は口籠った。

「古代エジプトのピラミッドを発掘したりした者は、多く、謎の死を遂げていますね。今回、毎朝さんは犠牲者が出ていないようで、ご同慶の至りだけれど、それは単なる偶然かもしれない。この先ことは分かりますよう……」

「おどかさないで下さい」

岩見は、わざと快活を装って言ったが、なんとなく胸騒ぎがしたのは、虫の知らせというものだったかもしれない。

三沢空港までは、ほんの少し、機が揺れたのを除くと、これという変わった出来事もなかった。

快晴の秋空から空港に舞いおりた一行は、そこで待っていたチャーター便の大型ヘリコプターに乗りかえた。

元航空自衛隊員だったという隊長は、巧みにヘリを離陸させ、迷ヶ岱に向けて飛行した。

ヘリの中では、岩見の隣りは、電気技師の福沢だった。

「ご苦労さまです。機械類はどうしたのですか？」

岩見が訊くと、

「一足先に、現地入りしていますよ。組立て作業も必要なもので、一緒に行ったのでは、使用が遅れるわけです」

と、福沢は説明してくれた。

福沢は年齢、四十歳くらい。長身で、なかなかの男前である。

「照明とか送風機とか、いろいろ持って行くんでしょう？」

「そうです。地底の探査ですからね。古代のピラミッド跡と思われる山の中腹に、洞穴があるという、

その探険が最大のテーマですから……」

「なん千年、なん万年という大昔の文化は、木でも鉄でも、一切が腐り果てて消えてしまうのだし、残っているものがあるとしたら、宝石の類たぐいでしょうか？」

「そうだと思いますよ。とにかく、奇蹟を期待するしかないんです」

福沢は、技師らしい生真面目な態度で言った。

ヘリは、海拔九九〇メートルの十和利山を望む草原地帯まで、ほんのひと飛びだった。このあたりは、キリスト伝説にちなんで、ヘデンの園と呼ばれている。

ここでヘリを車に乗りかえ、毎朝の新郷村通信員の加納安男の先導で、写真撮影をしながら、秋田県側への自動車道路をひた走りに走った。

さし当りの目的地は、鹿角市郊外にある小さな丘だ。この丘には名前らしいものもなく、今回の調査で、雨傘山という名をつけたくらいだ。ピラミッドのように、鋭角の四角錐にはなっておらず、丁度、雨傘の柄をとって、フンワリと、地上に広げた恰好だからだ。

しかし、この雨傘山には、昔から、「古代大王の墓」とか、「ピラミッド」という呼び声のあるほか、近頃では、「UFOの発着地」といった説まであるのだ。

同行した荒木教授の話では、雨傘山も、昔は、エジプトのピラミッドと同じ恰好だったが、日本は雨が多く、土をかぶったところに草木が生えてしまい、状況が一変したのだらうという。

このキャンペーンで、第一にとりあげられたのは、三カ月前、この山腹に、人が一人、はいれるような穴がみつかり、

「これはピラミッドの入口に違いない」

ということになったのが原因である。

穴の中に何が隠れているのか……もぐり込んでみないと、皆目見当がつかない。一応、人工のものという説と、自然にできた陥没穴の二説がある。それを確かめるのも、今回調査の大きな目標であった。

3

現地に到着した日は、地元関係者による、ささやかな小宴が、市内の目ぬき通りにある料亭で開かれた。

別に、これといううまいものもなく、ただ地酒のコクのあるのが、岩見には嬉しかった。一行の宿所は、〈津軽屋旅館〉というところで、宿の主人は青森の出身だという。

岩見は、宴の後、取材班の若い者と、麻雀をやり、午前一時に寝た。

翌日も相変わらず快晴だった。雨傘山が、日本にある古代ピラミッドのひとつかどうか、間もなく、分かると思うと、岩見の気持も急にシャンとしてきた。

太古、十和田湖周辺は、亜熱帯の植物が生えており、気候は、現在と著しく違っていたといわれる。しかし、今日では、鎮まりかえった山々には、頃合いの樹々が茂って、奥入瀬の景観のような、静かなたたずまいを見せている。

岩見は、一台の車に、作家の赤西と技師の福沢、そして、毎朝社会部の堤副主筆と共に乗り込んだ。堤は、非常に陽気な男で、

「雨傘山には、不思議な靈氣がありますよ。私は半月前に、下調べに来たとき、洞穴の中を十数メートル

ル、降りただけなのに、何か、恐ろしい靈魂が、闇の中に漂っているという感じでした」

と、話の内容とは裏腹に、アツケラカンとした言い方で喋った。

赤西は頷き返すと、

「古代の人間は、ピラミッドの中に、科学的な神秘というものを、閉じ込める才能を持っていたように思うんです。それを、今回、自分の肌で感じられれば、それだけでもいいと思っていますよ」と応えた。

技師の福沢は、技術屋らしく、何も言わないで、終始、黙っていた。

岩見は、なぜか、

「雨傘山というのは、本当に古代日本人のつくったピラミッドで、その内側には、あのピラミッド・パワールと呼ばれる、神秘的な力が働いているに違いない」

という、確信めいたものが心に浮んできた。

この感じは、車が、草原の一角でとまり、真正面、北側の方角に、突兀として聳える雨傘山を見たとき、一層、強くなった。

すでに、昨日から、雨傘山の脇にテント三張りを建て、そこで作業をしていた別働隊は、岩見らの車を見ると、何人かは、走り寄って来た。

移動テレビカメラのほか、洞の入口を中心に撮るカメラは、高い台の上に据えつけられている。

現在までに分かっているのは、雨傘山の洞の入口は一箇所、人間一人がやっとはいり込めるくらいの大きさ。内部になると、かなり大きくなる。それは天然のものとは思えない傾斜角を持ち、三方に分歧している。それぞれ、約三十メートルくらいまでは、探査してあるが、その先は、ローソクの光が、

今にも消えそうな酸素不足で、未だなんとも解明されていない。

もし、この雨傘山が人工のピラミッドならば、奥へ行けば行くほど、人工の手の加わった様子がハッキリしなければならぬ。この洞穴が、単に後世の人間が、入口のみを改修して、何かの目的に使用したことも考えられるからである。

車をおりて、堤は赤西に、

「先生。ひとまずテントの中で休んで下さい。一応、現状をご説明します。それから、洞内へはいっていただきます」

と、言った。

赤西と岩見は、堤の後から、テントの中へはいったが、福沢技師は、すでに、照明と電話線関係のチェックのために、洞の方へ姿を消した。

4

堤は、現状の説明を簡単にした。

「……洞内の道は、われわれが、本殿道と呼んでいる中央の、やや太い道のほか、右上方へ進む坑道と、左下へ行く通路の、都合三本が発見されています。このうち、赤西先生には、右上方の坑道を、まずお調べいただきたいと思うのです。これは、三十メートルほどはいったところに、人が二人か三人はいれる空間がありまして、そこに、線画らしいものが発見されました。おそらく縄文期のものだろうと、荒木教授はおっしゃっておりますが、人の首が宙を飛んでいるようにも見えます。一応、ここを祭壇室と